

【論 文】

山間地高校生の定着と移動に関する意識

吹野 卓・片岡佳美
(鳥根大学法文学部)

【摘 要】

本稿は、山間地に住む高校生が地元で定住することや都会に移住することについてどのように考えているのか、自由記述による回答を含む調査票調査のデータの分析を通して論じることを目的とする。高校生の自由記述による回答では、「広い世界を経験する」や「地域貢献をする」といった言葉が目立った。しかしこれらは、将来どこで暮らしているのかにかねらわぬイメージとは関係していなかった。かれらの将来の居住先についてのイメージは漠然としており、親の意向に影響されていることが分かった。

かれらはまた、都会に対する夢や憧れを述べず、地元で暮らすことの安心感を述べていた。他の地域での生活を知らないこれらの高校生にとっては、「よく知っている世界」だからこそ得られる安心が最も重要となることが示唆された。地方の若年層人口流出を議論するうえでは、「よく知っている世界」という安心についての詳細な分析が必要になるということを論じた。

キーワード：山間地の高校生、若年層人口流出、「よく知っている世界」という安心感

1. はじめに

本稿の目的は、鳥根県 A 町にある X 高校の生徒を対象に行なった、自由記述を含むアンケート調査の結果から、それらの生徒たちが地元で定住することや都会に出て行くことをどのように考えているのかを分析することである。

A 町は中国山地の山間に位置している。人口は 1 万人ほどで、人口密度は 24 人 / km²ほどである。県内の他の中山間地域と同様、人口減少・高齢化が進んでいる。かつてローカル鉄道の駅も町内にあったが乗客の減少で廃止となり、公共交通機関は一日数本、数路線のバスしかない。車で町を出ても、県庁所在地の松江市までは 2 時間半もかかる。県境を越えた広島市のほうが近いが、それでも高速道路を利用して 1 時間以上かかる。

この A 町に、県立 X 高校がある。町にとって唯一の高校である、この高校の存在は、A 町住民にとって重要である。町内中学校を卒業した生徒たちが X 高校に進学することで引き続き町内にいること、また、町外からの生徒が X 高校に入学し A 町で暮らすことで、A 町の賑わいや活気が維持されると感じられている。A 町の存続と X 高校の存続は連動しているかのように、住民は X 高校に大きな関心をもっている。

しかし、問題は高校卒業後である。戦後、学歴大衆化が進むにつれ、地方農村部においても、経済力と学力があれば長男であっても進学のため都会に出て行くのが既定路線となる地域が現れ出した(奥井、2016)。いまや進学を機とする都会への移動は、地方では普通のこととなっており、島根県も例外ではない。2020年の県外転出者は15～19歳が1,247人、20～24歳が3,220人、25～29歳が2,142人と、これだけで転出者全体の半数(49.9%)を占める(島根県政策企画局統計調査課、2021)。なかでもA町のような山間の地域では、大学や専門学校があり職種や企業の数もより多い松江市や出雲市といった県内の市部よりも、高校卒業後に地元を離れることは当然のこととして考えられているだろう。こうした条件不利地域特有の「ローカル・トラック」(吉川、2001)があると考えられる。

A町やその周辺で暮らしてきたX高校の生徒たちは、高校卒業後あるいはもっと先の自分自身がどこでどう暮らしていると考えているのだろうか。長年暮らしてきた地元についてどのような思いをいっているのだろうか。

歯止めがかからない地方の若年層人口の流出を議論するための、新しい切り口を見いだすためには、地方の高校生の都会・地方に対する意識や地域移動に対する意識を明らかにすることが不可欠である。筆者らは以前、こうした考えのもと、島根県松江市の高校に通う、大学進学意欲の高い高校生と保護者を対象に調査を行ない、そのデータを分析した(吹野・片岡、2020;片岡・吹野、2020)。それらから明らかになったのは、親の「わが子には広い世界を学ばせたい」という思いとその実践が、子どもの都会志向に影響を与えているということであった。ただ、これは松江市という、県内でも都市的な地域でのデータであった。今回は、同じ島根県、あるいは「地方」と呼ばれる地域の中でも、とくにその最深部に暮らす高校生の意識を調査する。

2. 調査の概要

アンケート調査は、2021年10月、X高校の全校生徒を対象に行なった。X高校には普通科と産業技術科があり、全校生徒は250人程度である。寄宿舎があり、町内だけでなく近隣の市町村からも生徒が集まるが、近年増えているのは県外からの生徒の入学である(島根県の高校では、全国に先駆けて県外からの生徒募集活動「地域みらい留学」を行なっている)。

アンケート調査の回収票数は244件であった。1年生からは89件、2年生からは92件、3年生からは63件の回答があった。普通科は156件、産業技術科は87件(うち1件は無回答)であった。

出身市町村は、A町が126件、近隣市町村が58件、その他58件(うち2件は無回答)であった。近隣市町村の内訳は、島根県が4市町村、広島県が3市町村である。一応市部も含まれているが、市に合併された旧町名をあえて記述している回答も一定数あり、多くはA町同様の山間部の出身者と見なすことができるだろう。分析では、A町とその近隣市町村出身の計184件のみを用いることとする。

調査票は、①性別、学年、学科を問う質問、②10年後/20年後/50年後、A町やその周辺で暮らしていると思うか(回答選択肢は、「暮らしていると思う」「暮らしていないと思う」)、③

親は自分(回答者)に対して A 町やその周辺に住み続けてほしいと思っていると思うか(回答選択肢は、「そう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」)、④人生の可能性を広げるため一度は都会に出たほうがいいと思うかについて選択肢を設けて問う質問(回答選択肢は、③と同様)、そして⑤高校卒業後、都会に移住せず A 町やその周辺で暮らしていくことについてどう思うか自由記述方式で尋ねる質問からなる。

なお、調査票の配布と回収では、学校の協力を得た。調査対象者には、調査は無記名で行ない、だれの回答であるかは特定できずプライバシーが外部に漏れることはないということを明示し、協力できる方のみ回答してもらった。

3. 調査結果

1) 定着意識

まず、10年後/20年後/50年後に A 町やその周辺で暮らしていると思うかについて、回答結果を見てみよう。

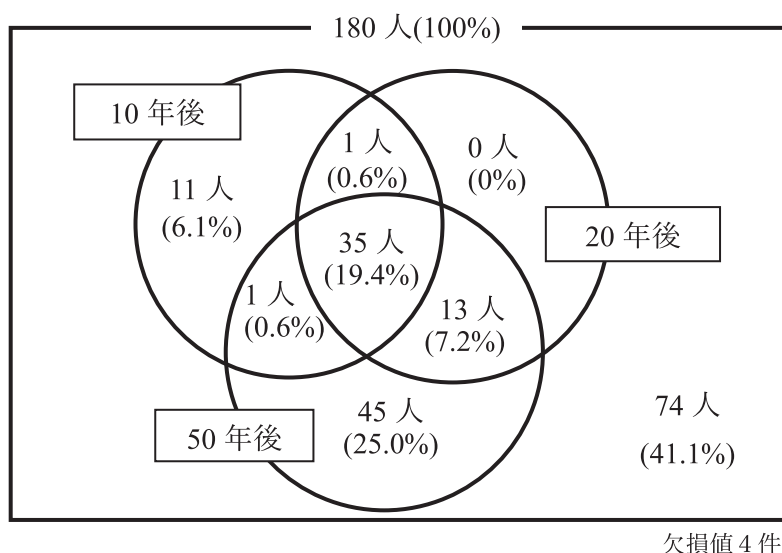


図1 10年後、20年後、50年後に A 町やその周辺で暮らしていると思うか (円の中が「暮らしていると思う」件数)

図1は、10年後、20年後、50年後のそれぞれについて、A 町やその周辺で「暮らしていると思う」「暮らしていないと思う」の回答件数を表したものである。それぞれの円の中の数字は、10年後暮らしていると思う/20年後暮らしていると思う/50年後暮らしていると思うと回答した人数(割合)を示し、円が重なっているところは二つ、あるいは三つの時期に暮らしていると思うと回答した人数(割合)を示している。たとえば、10年後には暮らしているが20年後や50年後には暮らしていないと思うという回答が11人いた、また、いずれの時期も暮らしていると思うという回答が35人いたということである。そして、円の外にある数字は、いずれの時期にも暮らしていないと思うと回答した人数(割合)である。

今回の調査結果によれば、いずれの時期でも「暮らしていると思う」という回答は35人(19.4%)であったのに対し、いずれの時期にも「暮らしていないと思う」という回答は74人(41.1%)であった。また、10年後と20年後には「暮らしていないと思う」が50年後には「暮らしていると思う」という回答が4分の1を占めていることは、ここで暮らしたいと思っけていてもそれは漠然とした遠い将来の話であることを示しているのかもしれない。

将来 A 町やその周辺に暮らしていると思うという回答と性別および所属学科との関係を示したのが図2と図3である。

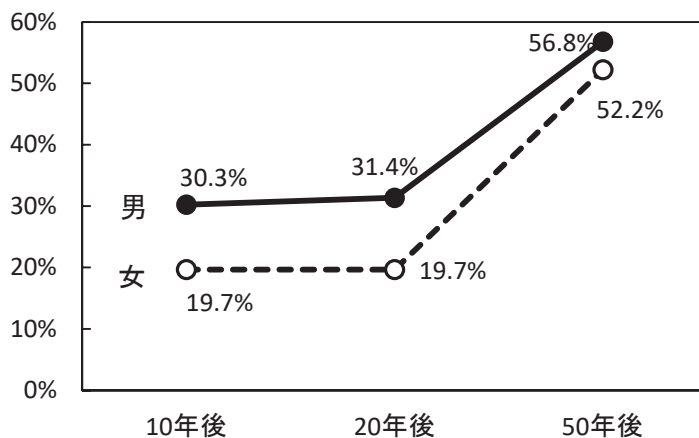


図2 将来 A 町やその周辺で暮らしていると思う人の比率(男女別)

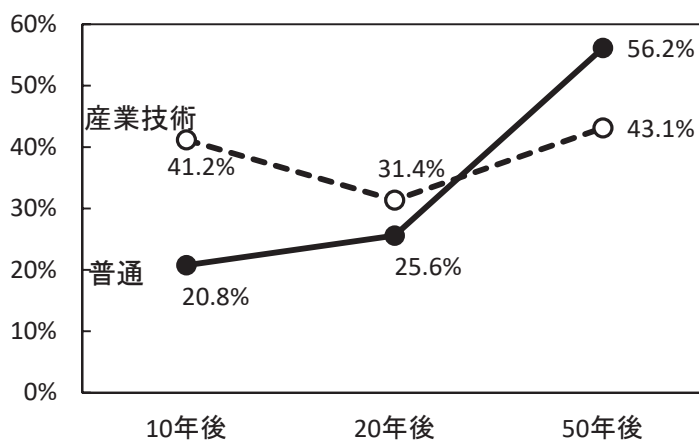


図3 将来 A 町やその周辺で暮らしていると思う人の比率(学科別)

図2では、いずれの時期についても、一見男子のほうが女子よりも割合が大きいうかがえるが、統計学的に有意な差は認められなかった。男女とも、10年後・20年後よりも50年後で「暮らしている」が多くなる。

図3では、10年後についての回答で、産業技術科と普通科の間に有意な差があった($\chi^2=7.83$ $p<.01$)。すなわち産業技術科の生徒は、普通科の生徒よりも、10年後もA町やその周辺に暮らしていると思っている。また、産業技術科の生徒においては50年後だけが高くなるという傾向も見られず、有意ではないが50年後に暮らしていると比率は普通科よりも低い。これは産業技術科の生徒の方がより地元志向が強いというわけではなく、職業選択等に伴う自己の将来像をより具体的に持っている現れではなかろうか。

2) 親の影響

将来地元で暮らしているかどうかと、親は自分(回答者)にA町やその周辺に住み続けてほしいと思っていると思うか尋ねた結果との関係を見てみよう。回答は、「そう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5点尺度で、肯定的回答ほど高得点となるよう回答に1～5点を配点した。

表1は、10年後/20年後/50年後にA町やその周辺に「暮らしていると思う」「暮らしていないと思う」別に、この得点の平均を比較した結果である。親の期待の認知は、自分の10年後/20年後/50年後の予測と明らかな関係をもっていることが分かる。

表1 親の期待の認知と、自分が思う将来の居住地との関係

A町や周辺に住んでいる/いない	10年後		20年後		50年後	
	いる	いない	いる	いない	いる	いない
「両親は住み続けて欲しいと思っているか」の平均値	3.54	2.83	3.61	2.78	3.36	2.62
n	48	133	49	131	95	86
η	.289**		.343**		.343**	

** : $p<.01$

3) 自由回答の分類

ここからは、高校卒業後、都会に移住せずA町やその周辺で暮らしていくことについてどう思うか、よい点、悪い点について自由に書くよう求めた自由記述での回答について見ていく。なお自由記述を用いた分析の対象は、A町とその近隣市町村出身の計184件中、記入のあった141件とする。

自由記述での文字数は、句読点などを含めて平均47.0文字、最大231文字、最小は3文字であった。ちなみに最小の3文字とは「不便。」の一言であった。

以下は、回答の例である。

例1

治安が悪くなく、自然をメインとしている町なので自然が好きだったり、年をとってゆっくりしたいときに帰ってくる場としては向いていると思う。しかし若者にとって店

が少なかったり山のアップダウンや近代化が少し遅れていることから、若いときは外に出たいと思ってしまう。

例 2

私は、A 町やその周辺で暮らすと、両親も安心でき、町づくりに協力できると思います。しかし、1 度は故郷から離れることも大切だと考えているので、卒業後は、1 度外に出ると思います。また、よい点は、自分も両親も安心できることです。悪い点は、外の世界を知らないままになってしまふことがあげられると思います。

例 3

1 回は、都会に行つて暮らしてみた方がよいと思います。この地域のよい所は、すれちがう人にあいさつをするところで、悪い点は、遠くに行くまで、時間がかかる。

このように、「自然」「店が少ない」「両親」「町づくりに協力」「安心」「一度は都会に」「あいさつをする」等々、それぞれの回答者はそれぞれの表現、言葉を用いて考えを述べている。これらを俯瞰し全体的な傾向を掴むために、自由記述を読んで、その内容についてタグを付与した。むろん筆者らの恣意的な読みによるものであるが、考察を深めていくための足場としての位置づけとして理解して頂きたい。

たとえば、上記の例 1 は、「治安がよく、ゆっくりできる」と「店が少なかったり」という言及があるので【穏やかな暮らし】と【不便】の 2 つのタグを付与した。

例 2 は、「両親が安心」と述べている点で【家族】、「町づくりに協力」と述べている点で【地域貢献】、「1 度は故郷から離れることも大切で、…外の世界を知らないままになってしまふ」と述べている点で【広い世界を知る】の 3 つのタグを付与した。

例 3 は、「都会に行つて暮らしてみた方がよい」ので【広い世界を知る】、「よい所は、すれちがう人にあいさつ」で【人との絆】、「遠くに行くまで、時間がかかる」で【不便】の 3 つのタグを付与、といったようにである。このように、1 件の回答に複数のタグが付与されるケースは多い。

このようにして 12 種類のタグを付与した。表 2 に、どのような言及に各タグを付与したかを示しておく。なお、いずれのタグも付与されなかったものが 13 件あったが、それらの多くは「いいと思います」といった、ごく短い回答のものである。

各タグの出現頻度を見たものが図 4 である。最も多いのは【地域貢献】で、141 件中 44 件となった。次いで【不便】が 40 件、【穏やかな暮らし】【広い世界を知る】がそれぞれ 28 件と続く。ここで、地域貢献に関する言及が多かったことは注視しておくべきであろう。

4) 将来の居住地についての回答と自由回答との関係

表 3 は、出現頻度が 10 件以上あったタグについて、そのタグの付与と、10 年後／20 年後／50 年後に A 町周辺地域に住んでいると思うかについての回答との関係を、クramer 係数で示したものである。

注にも記したように、表中の数値に下線がない場合は、そのタグが付与されたケースである

表2 付与したタグと、自由回答欄で言及されている内容

タグ	言及されている内容
不便	買い物、交通、遊びなどの不便さに言及しているもの
過疎高齢化	過疎高齢化に関連し、「若い人との出会いが少ない」なども含む
職が無い	地元では就職先が少ないことに言及しているもの
物価低い	物価、不動産価格などの安さに言及しているもの
地域貢献	地域活性化、伝統や地域文化を知ることなどに言及しているもの
住み慣れ	住み慣れていること、地理をよく知っていることなどに言及しているもの
人との絆	人情、人の温かさ、知人との繋がりなどに言及しているもの
家族	親など家族に言及しているもの
穏やかな暮らし	ゆっくり、静か、安全などに言及。老人や子どもの住みやすさも含む
自然	自然、空気のきれいさなどに言及しているもの
進路上必要	進学ややりたい仕事のために外へ出て行く必要について言及しているもの
広い世界を知る	都市での経験の大切さなどについて言及しているもの

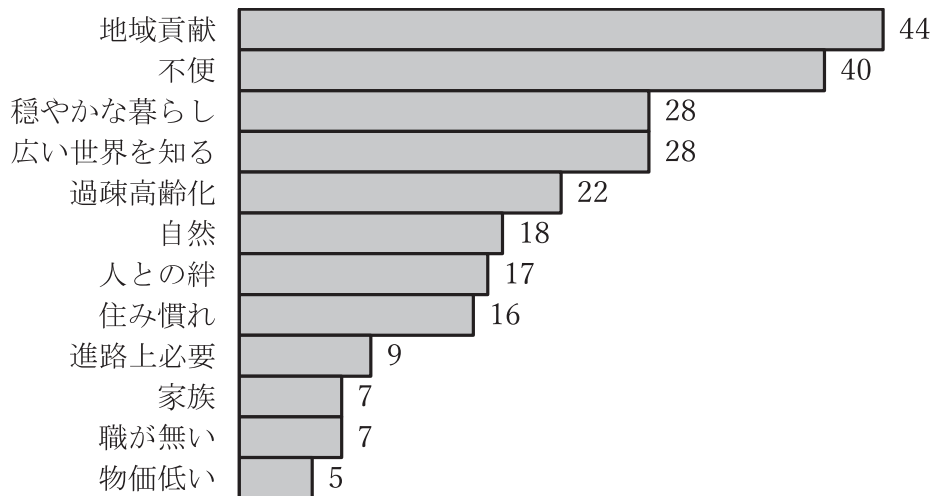


図4 付与されたタグの出現頻度

表3 各タグが付与された回答と、自分が思う将来の居住地についての回答との関係(クramer係数)

		不便	過疎 高齢化	地域貢献	住み慣れ	人との絆	穏やかな 暮らし	自然	広い世界 を知る
将来、周辺に 住んでいると 思うか	10年後	.141	.205*	<u>.013</u>	<u>.118</u>	.060	.211*	.165	.103
	20年後	.158	.151	<u>.069</u>	<u>.131</u>	.049	.118	.109	.050
	50年後	.195*	.064	<u>.023</u>	<u>.003</u>	.043	.029	.107	<u>.043</u>

* : p<.05

注：下線は、そのタグが付与された者ほど、該当年後にこの地域に住んでいると思っていることを表す。逆に、下線が無い数字は、住んでいないと思っていることを表す。

ほど将来 A 町やその周辺に暮らしていないと思っているという関係がある。たとえば【穏やかな暮らし】のタグを付与された回答者が「10年後には住んでいないと思う」と回答している。これは、【穏やかな暮らし】は地元に対するプラス評価として語られていることを考えれば奇異な感もする。

しかし、大切なことはむしろ、ほとんど関係していないということにあるのではなかろうか。これはもちろん設問の立て方にも問題があるが、うがった見方をすれば実は高校生にとって10年あるいはそれ以上の将来像は、「ふつうそうだろうな」程度の話なのかもしれないのである。そして、その「ふつう」は、具体的な「不便だ」といった理由よりも、たとえば表1で見た親の期待の認知など、すなわちその生活世界の中で維持されている「ふつう」とより深く関連しているのではないであろうか。

いずれにせよ、住み続けることや出て行くことに対する言語化されたレベルでの評価は、自己の将来予測と必ずしも密接な関係を持たないと思われる。では、その言語化はどのような形でなされるのか、すなわち如何なるレベルで、「住み続けること」と「出て行くこと」が対比されているのかについて見ていこう。

5) 価値としての語り

ここで、12のタグそれぞれがどのように共起しているのか、すなわち同じ回答者が同時に挙げているものはどれかを眺めてみよう。図5はKHコーダーで作成した共起ネットワークである。

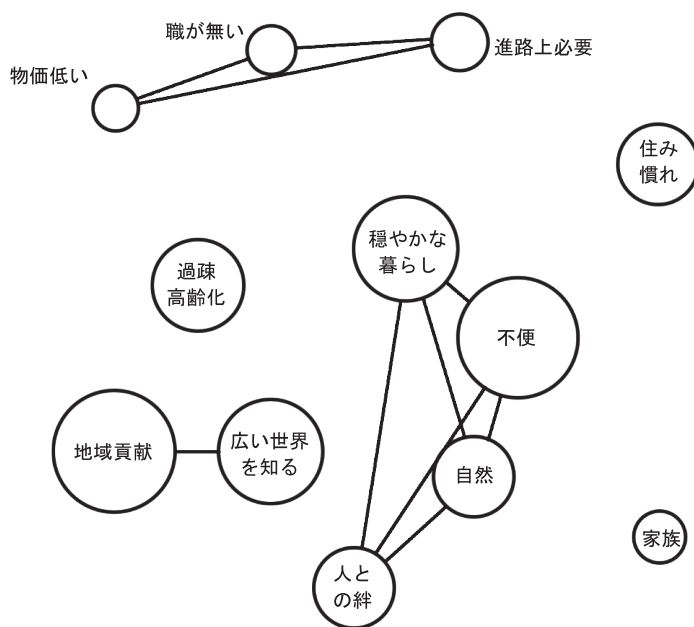


図5 各タグ間の共起ネットワーク

図5では、【広い世界を知る】と【地域貢献】の共起が確認できる。これらは、「幅広い経験を積むべき」とか「地域活性化が重要」などといったように、いずれも「価値」に関わるものである。すなわち、回答者が価値レベルで回答しようとしたとき、これら2つが対比項目として想起されていると理解できよう。

一方、【不便】、【穏やかな暮らし】、【自然】、【人との絆】も共起しているが、それは、いわゆる「田舎」の暮らしにくさと、良さとして常識レベルとして語られる項目が対比として想起されるからと考えられるのではなからうか。

また、【物価低い】、【職が無い】、【進路上必要】も出現件数は少ないものの共起している。これは、実利的なレベルでの対比ととらえることができるかもしれない。

自由記述欄への回答という限られたスペースで語られたことであるので、回答者である高校生はこれらの対比次元の一部を選択して記述したと考えることもできよう。そうであるならば、個々の回答を超えた全体から見えることとして、条件不利地域の高校生たちは、価値レベル、常識レベル、実利レベルなどの複数の次元で「内」と「外」を認識していることが指摘できるのではないか。かれらにとって常識レベル、実利レベルだけでなく価値レベルでの認識も言語化されやすい、ひいては意識化されやすい次元であることがうかがえる点は興味深い。

この価値レベルでの言語化について更に分析を進めよう。じつは、価値のレベルでの回答が将来についてのイメージと関係していないことが、「『人生の可能性を広げるため、一度は都会に出たほうがいい』と思いますか」という問いへの回答（「そう思う」が5点の5点尺度）と、将来A町やその周辺で暮らしているかの問いへの回答との関係を見たときに認められる。

表4 一度は都会に出たほうがいいかについての回答と、自分が思う将来の居住地についての回答との関係

	10年後		20年後		50年後	
	いる	いない	いる	いない	いる	いない
A町や周辺に住んでいる／いない						
「可能性を広げるため、一度は都会に出たほうがいい」の平均	4.15	4.36	4.20	4.34	4.36	4.24
n	48	133	49	131	95	86
η	.106		.066		.064	

全て ns

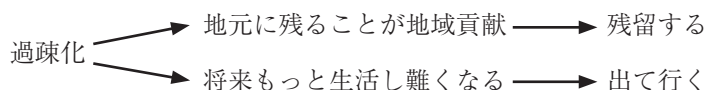
表4に見るように、一度は都会に出たほうがいいという価値は自己の将来像と関係していないのである。むしろそのような価値は無意味だと言っているのではない。高校生という段階では、必ずしも自己の将来像と結びついていないことを指摘しているのであり、実際の選択の瞬間にそれが自己の選択を意味づける大きな力を持つ可能性も大いにあるであろう。

であるならば、同様に価値としての【地域貢献】についても、「それが良いこととされている」という認知を高校生が持っているということに過ぎないのではなからうか。とすればそれは、フリーターがなぜフリーターであるのかを語る際に「やりたいことが見つかるまで」といった

定型的な言葉でしか語られないという事実こそ、「仕事」や「働く」に関する新たな言葉が今求められていることを物語っていると指摘した久木元(2003)にも通ずるものがある。「地域貢献」という語りは、地元に残ることがよいことになるための言葉がそれ以外にないということを示しているのかもしれない。そして、これがプラスの価値であることから、地元に残ることの正当化として自分自身に使用することもできるとも言えよう。

なお、当該地域は過疎高齢化が顕著であり、「若者が残ること」がそのまま地域貢献とされている。したがって、自由回答においても積極的に地域で活動するという記述はなく、「人口が減少している A 町に住むことで地域のためになるならいいなと思う。」といった形で「地域貢献」がイメージされているようである。このように、過疎化を自明な前提とした地域貢献であるためにあえて過疎化には言及されなかった結果、図5において【過疎化】と【地域貢献】の共起数がさして多くなかったと理解される。

さて、地元に残ること自体が地域貢献であるという意味で、過疎化と地域貢献は結びつきもっている。その一方で、「何十年後もこの地域に住んでいたら、過疎化が進んで、生活するのが厳しくなると思います。」といったように、過疎化自体が地元から出ていくこと、すなわち過疎化進行の原因となっていることをうかがわせる記述も相当数存在していた。まとめると、過疎化に関する自由回答欄の記述からは、以下の2つの語りのロジックが読み取れる。



では、若者はこの2つの間で選択を迫られているかというと、そうではなく、若者にとってはさして重要な問題ではないのかもしれない。いずれも10年後や20年後にどこで暮らしているかのイメージとは関係していないのであるから。ただし、過疎化が若者の移動に対して相反する2つのロジックをもたらしている点は興味深い。

6) 不便と安心

自由回答欄の記述に付与したタグのうち、【広い世界を知る】と【進路上必要】は、外の世界である都市部がもつプル要因に関するものである。とはいえ【進路上必要】のタグを付与したのも、その記述内容の多くは、ここには大学が無いからとか、就ける仕事の幅が狭いためといったどちらかというと消極的な内容であった。また【広い世界を知る】については「一回は都会に出たほうがいいと思う」といった漠然としたものがほとんどであり、先述したようにそのような価値として語られているに過ぎないと言える。

すなわち、ここで指摘したいのは、都市に対して憧れや夢が語られていないという事実である。現代の地方の高校生にとって、都市は必ずしも光り輝く魅力を放つ存在とは見なされず、むしろ地元がもつ「不便さ」を持たないという消極的な魅力を持つものに過ぎないのかもしれない。とするならば、プル要因、プッシュ要因といった枠組みはさしたる意味を持たないとも言

えよう。いずれにせよ、過疎化が進む山間部の現代の若者にとって「都市」はどのように見えているのかは興味深い問題である。

一方で、現在生活している地域については、その安心感を語る記述が多々みられた。たとえば「近所の方と仲が良いので相談できてストレスがたまらない」「これといった事件もないし安全だ」「知っている人がいるので地元で働くのが楽しいのではないかなと思います」「落ちついていてゆっくりできる」、「良い点は自分が迷子にならないこと」といった記述である。

都会から見れば同様に「地方」として括られるかもしれないが、地方都市と山間部の集落とでは生活空間の様相がかなり異なっていることを理解しておく必要があるであろう。とくに家と学校を生活の場としている若者にとって、生活空間はまさに「よく知っている世界」なのである。出会う人びとの大半は「知っている人」であり、路地の一つひとつも「知っている場所」である。たとえば、「バスの運転手が、いつもの高校生が停留所にいないと、走って来ないかとあたりを見回すような世界」である。このような個が見えている世界のもつ安心感について、もっと目を向け理解する必要があるのではないかと、分析をしながら気づかされた。

この点については、都会に出て行かず地元に残る層にとって、地元にしたほうがよく知っている人間関係に支えられながら生活できるというメリットがあると指摘する石黒(2018)や、「地元愛」や「地域の誇り」ではなく「地元つながり」が、地元で生きていくうえで重要であると述べた轡田(2017)とも重なるが、更に地方と呼ばれる地域のなかでも最深部にのみ存在する「小さな世界」の心地よさを指摘しておきたい。

以上指摘したように、山間部の高校生の視点から都市がどう見え、また地元を感じる安心感はいかなるものであるのか、これらをより深く理解することは大切なことではなからうか。筆者らのひとりにより、既に高校生へのより深いインタビューもなされているが、更なる調査、分析の課題としてここに記しておきたい。

4. まとめ

以上、下記のような点を指摘してきた。

- ・「広い世界を経験する」、「地域貢献をする」というのは、実は高校生にとっては外部から与えられた価値に過ぎず、自分の10年、20年、50年後といった将来の生活イメージとは必ずしも結びついていないのではないか。
- ・そして、高校生にとって10年あるいはそれ以上の将来像は、「ふつうは、そうだろうな」程度の話なのかもしれない、その「ふつう」は親の期待の認知などとより深く関連しているのではなからうか。
- ・いずれ直面する進学や就職という局面において、地元に残るか外に出るのかという岐路に立たざるを得ない山間部の高校生にとって、その「岐路」がどのように見えるのかを理解するためには、彼ら自身から都市がどう見え、また彼らが生きてきた「小さな世界」の特性を把握していく必要があるのではないか。

現在、地方では地域活性化、地域貢献といった事々が強調されている。しかし一人ひとりの

人間として、若者たちがどのような夢を描けるのかをしっかりと考える必要もあろう。都市に象徴される競争的価値に組み込まれるのではなく、過疎対策の対象として扱われるのでもなく、である。

最後に、以下のような記述も紹介しておこう。なるほど、むしろ「変わらないこと」によって、故郷が故郷として価値を持つことができるという見方もありえるのではなかろうか。

「自分は、A 町は、車があれば簡単に都会に行けて、何の不自由もないため、将来は帰ってきたいと思っています。変にこの町をもっと良くして、住みやすくして、などと手を加えるより、都会に疲れた人は、絶対に帰ってくると思うから、このまま変わらない町を維持し続けてくれるのが一番ありがたいと思います。」

【引用文献】

- 石黒格, 2018, 「青森県出身者の社会関係資本と地域間移動の関係」『教育社会学研究』102, 33-55。
- 吹野卓・片岡佳美, 2020, 「地方の進学希望高校生の転出意識—生徒と保護者のペアデータの分析—」『島根大学法文学部紀要：社会文化論集』16, 1-10。
- 片岡佳美・吹野卓, 2020, 「高校生の地元・都会に対する意識と親の家族実践—島根県の親子ペアデータの分析から—」『山陰研究』13, 87-96。
- 吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラック』世界思想社。
- 久木元真吾, 2003, 「「やりたいこと」という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結—」48(2), 73-89。
- 轡田竜蔵, 2017, 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房。
- 奥井亜紗子, 2016, 「学歴主義の浸透と農村長男の都市移動—兵庫県篠山市同郷団体会員調査をもとに—」『農業史研究』50, 2-13。
- 島根県政策企画局統計調査課, 2021, 「令和2年 島根の人口移動と推計人口」(<https://www3.pref.shimane.jp/houdou/articles/156185> より2022年9月17日取得)。

How do high school students who live in a rural area think about residing in their hometown or moving out toward the urban area?

Takashi Fukino and Yoshimi Kataoka
(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

[Abstract]

This paper aims at discussing how high school students who live in a rural area think about residing in their hometown or moving out toward the urban area by analyzing the data from the survey including an open-ended question.

In their open-ended answers, the expression such as “an experience of living in the wider world” and “contribution to the town” frequently appeared. However, it was suggested that these had nothing to do with the image of their own future life. It seemed that their image of the future was ambiguous and influenced by the hope of their parents.

We paid attention to that they didn't talk about their dreams or longing for urban cities and that they spoke of a sense of security with living in their hometown. For those high school students who don't know life in another region, the safety in their "familiar world" may be the most important point. Further investigation of “a familiar world” is needed to discuss the decrease of the younger population in the rural area.

Keywords: High school students in a rural area, the decrease of the younger population, the sense of security of “a familiar world”